

13) 緒方春朔にみる中国伝統医学

Studies on the Ogata Syunsaku and Chinese traditional medicine

医の博物館 西巻明彦

Akihiko Nishimaki, *Museum of Medicine and Dentistry*

蘭学における医学上の最大の功績といわれているものが、ジェンナーが開発した牛痘種痘法である。1849年、モーニッケのもとで得た痘苗が善感し、この方法が全国に急速に広まっていった。このことは当時の交通事情を考えてみると、近代交通が一般化するのには明治以降で、19世紀中頃の場合は徒歩・船・馬によるのが一般的である。しかし船による運搬は大量輸送には適しているが危険度が高く、風待ちによるロスも多く必ずしも安全確実なものではない。基本的には人に頼る運搬が主体で、痘苗も人による伝達が主体であった。急速な牛痘法の普及はそれを普及させるためのネットワークが全国に存在しないと実現は不可能であり、それ以前の人痘法によるネットワークがその基盤になっていたと今日考えられる。

天然痘予防法は今日、人痘法と牛痘法とに分けられているが、人痘法はアジア地域でその発展を見た。西アジア地域では痘苗に痘漿を用い、ランセットで手に接種を行う方法でトルコ式とも言われ、これはヨーロッパに伝わった。一方東アジア地域では、さまざまな方法が行われ、『医宗金鑑』(1742)の中に水苗種法、早苗種法、痘衣種法、痘漿種法が記載され、これらの方法は1744年、李仁山が長崎に来て種痘を伝えたという。

日本において人痘法の普及に大きく力を尽くしたのは緒方春朔であり、4つの方法のうち天然痘の痂皮を乾いたまますり潰し、へらで鼻孔の前に乗せて吸い込ませる方法を行った。1790年2月14日大庄屋天野甚左衛門の子供2人に種痘を行い成功させた。当時の秋月藩は伝染病の流行、害虫の発生により死者が続出し、人口が1/10に減少したと言われている。人々にとってはまさに「死」が日常光景であったが、そのような中で春朔は天野甚左衛門にせがまれるかたちで種痘を行ったのが実状である。秋月藩では藩主黒田長舒が貧民救済策を採り、人口も増えていったが、春朔の

人痘法もその政策の中のひとつであったと今日いわれている。

春朔の種痘に対する病理論は、中国伝統医学の概念を土台としている。『種痘必順弁』の中で「痘を鼻中に投入すれば其氣先ず肺に伝ふ。鼻は肺の外竅にして相伝の官たり。故に一たび肺に入るものは必他の血臓に伝ふ。其理ひとり痘のみに非ず。時期諸販般の疾皆鼻より入って病を名す。鼻は気の通路なり。故に天地間の氣に若干正の氣有れば人皆且つ氣を呼吸して邪をして内に引て病をなす。痘瘡流行の理も又これに等し。」と述べている。さらに「種痘ひとたび内に入りては五臓に伝送終に腎に至りて骨髓潜伏する処の痘毒を誘て出づ…中略…苗氣肺に受て次に心に伝ふ。心又之を腎に伝ふ。腎は骨を主る。痘毒骨髓に潜伏す。苗氣ここに至りて同氣相感して其毒を引出て」と記述している。春朔は痘毒について、胎児の段階で毒氣が入るという胎毒説の立場にたっている。この胎毒に対し、鼻中に痘痂を入れ、肺、心、脾、肝、腎の順番に痘痂が進み、痘毒が潜伏する骨髓にいたって両者が感応し、腎、肝、脾、心、肺の順番で移動し、終に体表から痘毒が排出されるという作用機序である。このように内毒があり、さらに外毒が入ることにより、両者が感応して内毒がなくなるという概念は、他に橋本伯寿の萬病萬毒論で認めることができる。また、五行学説では肝から心、心から脾、脾から肺、肺から腎、腎から肝という機序をたどるが、すでに『解体新書』が出版され、ここでは鼻から下へ形態的に肺、心、脾、肝、腎の順番になっている点が注目される。多少の差異はあるものの、春朔は中国伝統医学を基盤としている。

緒方春朔は漢学者か蘭学者なのかという点について考えてみると、基本的に当時の日本は漢学を基本としている。春朔は長崎に留学し、中国式人痘法のみならず、オランダ商館に出入りして種痘

についての見解を調査している。また医学のみならず火薬についても調査したようで、後年秋月で弟子達と火薬の実験も行っている。以上の点から蘭学者としての側面も見逃せない。このことは当

時の学者達は漢学を基本としながらも新しい蘭学をも受容していた二面性をもっていたことが特徴として挙げられると考える。